

中学校における漢文教育の再検討（六編）

安 東 俊 六

一 はじめに

私は既に、平成10年12月に改定された中学校学習指導要領とそれに準拠して編纂された五社の国語の教科書の漢文教材について、問題点を指摘し、その指摘に即して新たな教材の私案を提示してきた。(注1)

小論では、(1)故事成語 (2)思想 (3)史伝 (4)文学の4領域のうち、最も問題が多いにも拘らず等閑に付されてきた文学の教材について検討を加え、少なくとも現在用いられている教材よりは中学生に受け入れられやすく、文学作品であるからには当然中学生が共感しうるような教材を試みの案として提示してみたいと思う。

二 学習指導要領における漢文の位置づけとその問題点

学習指導要領において漢文に関する記述は、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」に次のようにみえる。

- 1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。
 - (4) 第2の各学年の内容の「C読むこと」に関する指導については、次の事項に留意すること。
 - イ 古典の指導については、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めるようにすること。その教材としては、古典に関心をもたせるように書いた文章、易しい文語文や格言・故事成語、親しみやすい古典の文章などを生徒の発達段階に即して適宜用いるようにすること。なお、指導に当たっては、音読などを通して文章の内容や優れた表現を味わうことができるようにし、文語における言葉のきまりについては、細部にわたることなく、教材に即して必要な範囲の指導にとどめること。

ここに見るように、学習指導要領では、漢文を学ぶことによって、「我が国の文化や伝統について関心を深めるようにすること」という達成すべき目標が掲げられているのだが、今日中学校の教材として採られている文学教材において、この目標を達成することは極めて困難である。文学教材が何故に他の三領域に比べて目標の達成が困難かということについては、すでに少し論じたが(注2)、ここで改めて詳しく論じておきたい。

三 五社の教科書の文学教材

現在中学校で使用されている学校図書・教育出版・三省堂・東京書籍・光村図書の五社の教科書では、文学教材としてどのような作品が採られているのか、見てみよう。

学校図書 国語3

- 5 文化歴史 今に向かって
漢詩（漢文）

- 杜甫 「春望」
 王維 「送元二使安西」
 李白 「静夜思」
- 教育出版 伝え合う言葉 3
 4 古典を味わう
 漢詩
 李白 「黄鶴楼送孟浩然之広陵」
 杜甫 「春望」
- 三省堂 現代の国語 2
 5 古典に親しむ
 漢詩の世界
 孟浩然 「春暁」
 李白 「黄鶴楼送孟浩然之広陵」
 杜甫 「春望」
- 東京書籍 新しい国語 3
 5 古典を味わおう
 漢詩二編
 李白 「黄鶴楼送孟浩然之広陵」
 杜甫 「春望」
- 光村図書 国語 2
 五 古典を楽しむ
 漢詩の風景 (石川忠久氏の文章)
 孟浩然 「春暁」
 杜甫 「絶句」
 李白 「黄鶴楼送孟浩然之広陵」

上に見るとおり、教材は唐詩に限られており、詩人は孟浩然、王維、李白、杜甫、詩も孟浩然の「春暁」、王維の「送元二使安西」、李白の「黄鶴楼送孟浩然之広陵」・「静夜思」、杜甫の「春望」・「絶句」に限られている。

四 文学教材の問題点

唐詩は、中国の文学史において注目すべき精華であることは疑う余地がない。また孟浩然、王維、李白、杜甫の四詩人も文学史上に一項目を設けて論ずるに足る、優れた詩人たちであることは間違いない。更に言えば、採られているこれらの詩は、いずれも名作であると高く称賛して誰も異存を唱える人はいないであろう。それほどに唐詩の文学史上に占める地位からみても、詩人たちがいずれも傑出しているという点からみても、作品がいずれ劣らず優れているという点からみても、五社の教科書に採られた詩は、文学作品としてみた場合には、非を鳴らす余地のないものであると言ってよいであろう。

しかし、いま改めて、中学校の教材という観点から捉え直した場合には、問題なしとは言えないように思われる。詩の教材を二年生で学ぶにせよ三年生で学ぶにせよ、生徒は前段階として一年生で(1)故事成語を、二年生で(2)思想を、それも『論語』の三章ないし四章を学んでいるに過ぎないのである。その程度の基礎すら築かれているとはいえない段階で、突如中国の文学の至宝ともいべき作品を読むことになるのである。あまりに大きいこの段差を、果たして中学生がたやすく乗り越えられる

のであろうか。

文学を読むからにはたとえ中学生であろうと名作を読むべきだというのは、正論であろう。このことには、私も異議を唱えるものではない。しかし、作品を読む側の中学生と(a)作者との年齢の違い、(b)詩が作られた当時と現在との社会状況の違い、そして何よりも大きい(c)現在との文学の概念の違いを、教師がどの程度の予備知識を提供するかにもよるが、中学二年生・三年生がいとたやすく乗り越えて理解しているとは思えない。

まず、(a)作者との年齢の違いについて考えてみよう。

孟浩然、王維、李白、杜甫の生卒年については、問題とされているものもあるけれども、ほぼ孟浩然是689年～740年、王維は701年？～761年、李白は701年～762年、杜甫は712年～770年の人であろう。孟浩然の「春暁」詩は、今の中学生の年齢で作った詩とは考えられないが、しかし年齢に関わりなく中学生でも理解しうる詩であるので問題ないであろう。また同じく王維の「送元二使安西」詩も、今の中学生の年齢で作った詩ではないものの、日本における「螢の光」と同じように中国で送別の詩として歌われてきたことが物語るように、送別の情を詠った詩として優れていることは、中学生にも充分理解できるであろう。因みに偶然の一致に過ぎないのであるが、「螢の光」も出征する夫を送る歌である。「螢の光」も1・2番の歌詞をのみ取り出して歌っていれば、今日学校で歌っていても違和感はないので、「送元二使安西」詩についてもこだわる必要はないのかも知れないが、ただ中学生に「君に勧む更に尽くせ一杯の酒」は、いささか気にならないでもない。

ところで、李白の「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩・「静夜思」詩の二首の詩も製作時を特定しにくい、「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩は李白が黄鶴楼の近くにいた24,25歳から36歳までの作であることは間違いなく、「静夜思」詩も故郷・蜀を離れた24,25歳以降の詩であることは間違いのない。この二首の詩のうち年齢差が問題になるのは、「静夜思」詩である。夜はぐっすり熟睡して目など覚まらず、家から登校してきた中学生は、「頭を挙げて山月を望み 頭を低れて故郷を思ふ」という詩句を読んで、その情景を描くことはできるであろうが、この詩に共感を覚えるといったところまでいくものであろうか。

「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩は、年齢差が問題というよりも(b)詩が作られた当時と現在との社会状況の違いが問題となる詩であるので、後にそこで述べることにしたい。

もっとも問題が多いのは、杜甫の「春望」詩・「絶句」詩であろう。「春望」詩は杜甫が46歳のときの作、「絶句」詩は53歳のときの作である。この二首の詩も(b)詩が作られた当時と現在との社会状況の違いが問題となる詩であるので、詳しくはそこで述べることにするが、「白頭搔けば更に短く 渾べて簪に勝へざらんと欲す」は、あまりにも中学生とかけ離れた描写で、中学生に理解せよというのが気の毒なくらいである。そもそも46歳・53歳といえ、中学生にとっては父親の年齢あるいはそれ以上の年齢であろう。もし仮に中学生が「どうして父親の年齢の、しかも中国の、1200年以上も前の詩人の詩を理解しなければならないのか」と尋ねたとしたら、教師はなんと答えたらよいのであろうか。中学生から作者との年齢差を指摘された場合には、教師には答える術がないのではなかろうか。

次に、(b)詩が作られた当時と現在との社会状況の違いについて考えてみよう。

孟浩然と李白との年齢差は12歳ある。李白の「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩は、のちに詳述するように李白28歳、孟浩然40歳の時の詩ではないかと、私は推測している。ところで李白は、この詩で孟浩然を「故人(親友)」と呼んでいるけれども、現在の中学生には奇異に思えるのではなかろうか。今日でも年齢差の大きい友人というものはないわけではないが、14・5歳の中学生には想像することすら難しいであろう。もっともこの詩は送別の詩であるから、旅立つ人を親しみを込めて「故人」と呼んだに過ぎないという見方は、この場合当然成り立ちうる。しかしそれにしても、12歳の年齢差のある他人が、送別の席に連なるということ自体が、現在の中学生には馴染みがなく、理解しがたいことであろう。ここではやはり、当時の才能重視の知識人社会の年齢差を越えた、極端な場合には10歳位の

子供であっても大人顔負けの才能さえ持ち合わせていれば大人にたち混じって交際できたという、特殊な社会の状況の予備知識が必要とされるであろう。

これは社会の状況の違いではなく、詩が作られた場所の問題だが、教科書に採られた「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩では取り上げておかなければならないことがある。この詩を採った教育出版・東京書籍・光村図書の3出版社の教科書では、現在の黄鶴楼の写真を掲載している。また三省堂の教科書では、『唐詩選画本』の黄鶴楼の図が掲載されている。教育出版・東京書籍の写真は、黄鶴楼の背後から黄鶴楼と武漢長江大橋を俯瞰したもの、光村図書の写真は、長江の側から黄鶴楼を見上げた正面図である。周知のとおり現在の黄鶴楼は、1985年に蛇山の山上に建てられたもので、李白の詩が詠われた黄鶴楼ではない。李白が詩を作った当時の黄鶴楼は蛇山の山上にではなく、おそらく麓にあったものと考えられて、李白の目の位置は写真の黄鶴楼上よりもはるかに低かったはずである。それを何の断りもなく写真を見せ付けられれば、中学生は現在の黄鶴楼上からの眺めを李白の当時のものとして当然頭に思い描く。その意味では、三省堂の『唐詩選画本』の黄鶴楼の図も同様によくはない効果を中学生に与えているといえる。この図では黄鶴楼が強調されて描かれていて、長江の流れに対して大き過ぎ、「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩の鑑賞の妨げにこそなれ、助けにはならない。また教育出版・東京書籍の写真は、せっかく長江を視野の内に収めながら、詩の鑑賞の助けとなっていない。武漢長江大橋は全長1670mあるそうである。さすればこの長江の川幅は、およそ1500m位あることになりそうだが、掲載された写真では川幅が極端に狭く見えて、「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩の鑑賞の妨げになる。「碧空に尽く」や「天際に流る」といった李白の表現を読み取る助けとなる写真や挿絵図でないならば、むしろ用いないほうが余分な先入観を与えず、中学生にのびのびした想像を生ませることができる。

今ひとつ付け加えておかなければならないのは、この詩が作られた当時の孟浩然と李白の置かれていた状況についてである。注記された詩人の生卒年からだけでは、中学生にはこの詩が作られた当時の孟浩然と李白の置かれていた状況が把握できない。この詩がいつ作られたものかは特定しがたいが、李白が黄鶴楼の近くにいたのは、蜀から出てきた724・725年頃から安陸を離れる736年までの間であることは間違いない。私は詩中の「孤帆」という語から、728年に孟浩然が科挙の試験に落第した直後の作ではないかと推測するが、今仮にそうだとすると、李白は28歳、孟浩然は40歳である。当時の李白は蜀から出てきて間もない頃で、その辺りで詩名が知られ始めたところ、一方孟浩然はその辺りで名を知らないものとしてない大詩人であった。想像を逞しくするに、旅立つ孟浩然の送別の宴に、詩名の売れ始めた年若い李白が招かれて、その評判どおりに見事な送別の詩を作って見せ、宴に一段の興を添えた、といったところであろうか。

杜甫の「春望」詩の場合は、中学生が理解し難い社会状況の違いがあるわけではないが、実感として把握しがたいものがあることは否めない。今のわが国の状況は、幸いにして「国破れて山河在り」や「烽火三月に連なる」という悲惨な状況ではない。したがって中学生の心も、「時に感じては花にも涙を濺ぎ 別れを恨んでは鳥にも心を驚かす」という状態ではない。また日本は1945年の敗戦後約60年間国内での戦争の経験をもたない。今日の中学生にしてみれば、親の世代も戦争の体験を持たないわけであるから、戦争というものの悲惨さの実感は乏しいであろう。一方「春望」詩の作られた当時の状況をみると、唐の王朝が興って以来130余年、すでに4世代以上にわたって国都が脅かされるような戦乱はなかった。それが玄宗皇帝は蜀に蒙塵し国都は占領されるという状態になったのであるから、平和な世を謳歌していた当時の人々にとって、安史の乱はまさに驚天動地の大動乱であった。「国破れて山河在り」とは、そうした状況の下での絶唱である。戦いがない時代というものがかに幸せであるかということは、勿論中学生にも十分に噛み締めて分かってもらいたい。しかし中学生が実感としてそのようなことを感じ取れる詩は、何も「春望」詩のような初老の詩人の詩を採らなくても他にいくらでもある。教材としては、やはり中学生に年齢差を感じさせない作品を選ぶべきであろう。

「絶句」詩に至っては、更に現在との社会状況の違いを詳細に説明しなければ、中学生には理解し難いであろう。「今春看すみす又た過ぐ 何れの日か是れ帰年」は、何の説明も加えずに中学生に読ませれば、単なる老人の望郷の思いと受け取られるであろう。その受け取り方は、大筋として誤っているわけではない。しかしこの詩を作った当時の杜甫の思いは、現在の中学生が想像しうる程度の望郷の思いといったものではない。杜甫はその名が示すように長男である。儒教の倫理を重んじた唐の時代の知識人としては、当然長男は先祖の祭りをしなければならぬ。しかし杜甫は、華州の役人を辞める前の758年冬から759年春にかけて洛陽の陸渾荘に帰って以来、「絶句」詩を作った764年春まで一度も郷里には帰っていないのである。妻や息子を郷里に置いて先祖の祭りを代行させるという方法もあったが、杜甫は家族を連れて成都に来ていたので、郷里での先祖の祭りはまったく行われていなかったことになるのである。その自責の念はきわめて強いものであったであろう。

また杜甫には、穎・観・占・豊という四人の弟と韋氏に嫁した一人の妹がいた。当時既に父親が亡くなっていたので杜甫は戸主であった。にもかかわらず、杜甫は当時弟や妹の面倒を充分にみてやっていたのでない。末の弟の豊は消息さえもはっきり掴めていなかったし、妹は既に未亡人となっていた。そうした状況のもとで兄として戸主として何もしてやれないでいるという慙愧の思いを、杜甫が当時いかに強く抱いていたか、それを中学生がこの詩から読み取ることは極めて難しいことである。

中学生の教材の中で、漢文の教材ほど(a)作者との年齢の違いがあったり、(b)当時と現在との社会状況の違いがあったりするものは稀であろう。国語の教材に限ってみても、日本の古典として学ぶ古文の教材は文学史を念頭においてのことであるので致し方ないが、現代文はおおむね中学生の年齢に応じた内容のものが採られている。しかし漢文の教材は内容が中学生の年齢に応じたものであるとは決していえない。殊に詩の教材はそうである。したがって中学生と(a)作者との年齢の違いがある限り、(b)詩が作られた当時と現在との社会状況の違いがある限り、教材の唐詩は暗記しておかなければならない。中学生の今の年齢では理解し難い内容を含んでいるので、その詩境が理解できる年齢に達するまで暗記して覚えておく必要があるのである。暗記して覚えておけば、詩境が理解できる年齢に達した時、あれはこういう事を詠った詩だったのかと、きっとそのとき得心するであろう。

(c)現在との文学の概念の違いは、是非中学生に教えるべきであろう。私の30年ほどになる教師経験では、高等学校までにこのことを明確に習ったと答えた学生は皆無に近い。これは学生が習ったのだけれども忘れてしまったというよりは、むしろ中学校・高等学校の漢文教材を扱う時に明確に教えられていないのではなかろうか。よしんば明確に教えられているのだとしても、大学生の段階ですでにこれほどまでに忘れてしまっているとすれば、それも問題である。

文学の概念の違いについては、高等学校の国語教育に向けて、すでに鈴木修次氏が『高校通信東書国語』の「中国文学と日本文学」の15回シリーズの第1回「文学観の違い」(1975年5月)で論じておられる。専門の著書としては鈴木貞美氏の『日本の「文学」概念』(作品社・1998年)もある。

中国学が専攻であった私にとっては、文学の概念の違いはいつしか自明のこととなってしまっていて、果たしていつ身に付けた知識であったのか記憶が定かでない。しかし高等学校までには身に付いていたのではなかろうか。大学で中国文学を学んだ時に違和感を覚えた記憶がないからである。

文学の概念の違いとは、いうまでもなく、中学生の持つ文学の概念が英語の「literature」に基づくものであるのに対して、漢文でいう「文学」は「literature」とは別物であるということである。「literature」に基づく中学生の文学の概念では、作品は作者から独立してあり、作品中に描かれる内容は作者の人間性の優劣とは直接に結びつかない。しかし漢文でいう「文学」、つまり「文学」という語の原義には、作者の人間性が厳然として基盤にある。その上で文才を兼ね備えた者が作品を生み、文才を兼ね備えた者同志がそれを享受し合うのであって、作者の人間性を抜きにした「文学」などといったものはありえないのである。勿論漢文という場合の範疇には入らず、後に「俗文学」と俗を冠

して、雅なる「文学」と区別するものは別である。いわゆる娯楽性が追求された「俗文学」は、元来「文学」とは一線を画するものなのである。

漢文に初めて触れた中学生は、何か重苦しい、説教くさいと感じるそうである。この感覚は誤っていない、むしろ鋭いと言ってよい。自らの持つ文学観で気軽に唐詩を読み始めた中学生が、突然作者の高い人間性に触れれば、何か重苦しいと感じたり、何か説教くさいと感じるのは、至極当然のことであろう。このように中学生は直感として漢詩が異質なものであることを感じ取ることができる。しかしそれが何によるものであるのか、ということは分からない。したがってここで教師の解説が必須のこととして要求される。たとえ中学生が直感によって異質なものであることを感じ取っても、そこに教師の適切な解説がなされなければ、中学生のせっかくの文学的直感も活きず、何か重苦しい何か説教くさいと感じたまま終わってしまうのである。それはまことに惜しい。教師の適切で明解な解説が欠かせない所以である。

五 文学教材の試案

中学校における漢文教材としての詩は、先に述べた(a)作者との年齢の違い、(b)詩が作られた当時と現在との社会状況の違いが、中学生の詩の鑑賞の障害にならないことはもちろんのこと、文学教材であるからには、中学生が共感するものでなければならぬであろう。また漢文の教材であるからには、漢詩としての趣きを中学生に感じ取らせうるものでなければならぬであろう。しかし、従来の教材のように何の基礎知識も無しに唐突に詩の精華の唐詩をというのではなく、六朝以前の詩にも範囲を広げて内容の上で親しみやすいものを取り上げるべきであろう。またいうまでもなく長編の詩は避けるべきであろう。

これらの諸点を踏まえて、文学教材の試案を提示してみたいと思う。ただ小論では紙幅の都合もあるので、『詩経』所収の詩・漢魏晋の詩までの中から選んだ詩としたい。

これから掲げる詩は、白文は省き、書き下し文のみとする。中学校の国語の教材に白文は不要であると考えからであり、書き下し文は漢文独特の言い回しを除けば日本語の古文であって、中学生にも抵抗が少ないと考えるからである。また歴史的仮名遣いも用いない。古文と考えれば用いるべきであるが、漢文教材の場合にはできるだけ抵抗を少なくして中学生に詩を読みやすくしたいからである。

1 静女 (『詩経』邶風)

静女其れ妹たり
 我を城隅に俟(ま)つ
 愛として見えず
 首を搔きて蜘蛛す (一章)

静女其れ嬖たり
 我に彤(あか)き管(ふえ)を貽(おく)る
 彤(あか)き管(ふえ)有(そ)れ煒(あか)し
 女(なんじ)の美しきを説(よろこ)び憚(よろこ)ぶ (二章)

牧(の)より莢(つばな)を帰(おく)る
 洵(まこと)に美しく且(か)つ異(め)ずらし
 女(なんじ)の美しと為(す)に匪(あら)ず
 美しき人の貽(おくり)もの (三章)

この詩は読めば明らかなように恋の詩である。『詩経』の中の男性が詠った恋の詩では、最も美しいものであろう。このように純朴で美しい恋の詩であれば、中学生に違和感はないのではなかろうか。漢詩はすべて重苦しく説教くさいものではなく、かくもおおらかに純朴で美しい恋の詩が今から2500年以上も前に詠われていたことを知ることは、中学生には驚きでもあろう。次に『詩経』の女性の詠った最も美しい恋の詩を挙げて見よう。

2 子衿 (『詩経』鄭風)

青青たる子(なんじ)の衿
 悠悠たる我が心
 縦(たと)え我往かずとも
 子(なんじ)寧(なん)ぞ音を嗣(つ)がざる (一章)

青青たる子(なんじ)の佩
 悠悠たる我が思い
 縦(たと)え我往かずとも
 子(なんじ)寧(なん)ぞ来たらざる (二章)

挑たり達たり
 城闕に在り
 一日見ざれば
 三月の如し (三章)

「一日見ざれば 三月の如し」は名句として周ねく知られているから、あるいは中学生でもこの句を既知っているかもしれない。そして簡潔でおおらかでしかも直截的な詠いぶりは、中学生にも好感を持って迎えらるるのではあるまいか。

次にはおおらかな恋愛詩とは対極にある若者の懊悩の詩を挙げてみたい。

3 柏舟 (『詩経』邶風)

我が心鑑(かがみ)に匪(あら)ず
 以て茹(はか)るべからず
 亦た兄弟有れども
 以て據(よ)るべからず
 薄(いささ)か言(ここ)に往き愬(うった)うれば
 彼の怒りに逢う (二章)

我が心石に匪(あら)ず
 転がすべからず
 我が心席(むしろ)に匪(あら)ず
 巻くべからず
 威儀棣々として
 選(ま)ぐべからず (三章)

憂心悄悄として
 群小に慍(うら)まれ
 閔(うれ)いに覩(あ)うこと既に多く
 悔(あなど)りを受くること少なからず
 静かに言(ここ)に之を思えば
 寤(さ)めて辟(むねな)で有(ま)た標(う)つ (四章)

日や月や
 胡ぞ迭(たがい)にして微なる
 心の憂いは
 澣(あら)わ匪(ご)る衣の如し
 静かに言(ここ)に之を思えども
 奮飛すること能わず (五章)

この詩に詠われているような自分自身でさえ何によるものなのか捉えようがなく、まして他人に話しても理解してもらいようのない憂いというものを、中学生は既に抱いた経験を持っているであろう。人に話しても結局は解かしてもらえないので、自分ひとりが何故このような思いに囚われるのかと独り思い悩むのが思春期の常である。自分ひとりが思い悩んでいるのだと中学生が思い込んでいることを、2500年以上も前の人が既に同じように悩んでいて、かくもみごとに詠ってみせてくれているということは、共感を覚えると同時に心の救われる思いがするであろう。

ここまでに掲げた『詩経』の詩は、一首を採ると各章に詠われる重複が中学生の目には単調に映り、しかも漢詩の教材としては長くもなる。したがって一章ないし二章を選び採ることが望ましいであろう。

次の二首の詩は、人生いかに生きるべきかを詠った漢代の詩である。一首は人生は二度とないものであるから、慎重に努力を重ねて生きるべきであると詠い、一首は所詮百年に満たない短い人生のこと、楽しみを極めなければ悔いを残すことになると詠っている。

4 長歌行 (『文選』巻27)

青青たる園中の葵
 朝露 行日に晞(かわ)く
 陽春 徳沢を布(し)き
 万物 光暉を生ず
 常に恐るるは秋節の至るや
 焜黄して華蘂の衰(う)ること
 百川 東して海に至らば
 何れの時か復た西に帰らん
 少壮 努力せずんば
 老大 乃ち傷悲せん

5 古詩十九首(第十五首) (『文選』巻29)

生年百に満たざるに
 常に千歳の憂いを懐く
 昼は短く夜の長きに苦しむ

何ぞ燭を秉(とつ)て遊ばざる
 楽しみを為すは 当に時に及ぶべし
 何ぞ能く来茲を待たん
 愚者は費を愛惜して
 但だ後世に嗤わる
 仙人王子喬
 与(とも)に期を等しくすべきこと難し

人生いかに生きるかの選択の難しさは、古今・洋の東西を問わず変わりがない。上に掲げた二首の詩はそのことをよく示している。人生は短いといえ短くもあり、長いといえ長くもある。それを太く短く生きるのか、刻苦勉励して充実した老後を期するのか、中学生も選択には大いに迷うところであろう。二首を読み比べて、考えてみる契機としてみてはどうであろうか。

6 詠懐詩 第八首 阮籍 (『文選』巻23)

平生 少年たりし時
 軽薄にして絃歌を好む
 西のかた咸陽の中に遊び
 趙李と相い経過す
 娛樂未だ終え極(は)てざるに
 白日忽ち蹉跎たり
 馬を駆りて復た来たり帰り
 回顧して三河を望む
 黄金百溢尽き
 資用常に多きに苦しむ
 北のかた太行の道に臨むに
 路を失(たが)えて将(は)た如何せん

人生を踏み誤った後悔の詩であるが、中学生が先掲の古詩十九首とあわせて読むとき、更に考えさせられるものがあるであろう。

7 詠懐詩 第十五首 阮籍 (『文選』巻23)

独り空堂の上に坐す
 誰か与(とも)に歎(たの)しむべき者ぞ
 門を出でて永路に臨むも
 行く車馬を見ず
 高きに登りて九州を望めば
 悠悠として曠野を分る
 孤鳥は西北に飛び
 離獣は東南に下る
 日暮親友を思う
 晤語して用(もつ)て自ら写(のぞ)かん

孤独に耐えかねて、胸襟を披いて話せる親友を求める詩である。先掲の『詩経』柏舟と同じく、中

学生には思春期に味わう言い知れぬ孤独感を癒す効果が期待できるのではなかろうか。

8 詠史 第七首 左思 (『文選』巻21)

主父宦(つか)うるも達せず
 骨肉も還(かえ)て相い薄(うとん)ず
 買臣采樵に苦しみ
 伉儷宅に安んぜず
 陳平産業無く
 帰来するも負郭に翳(かく)る
 長卿成都に還(かえ)るも
 壁立して何ぞ寥廓たる
 四賢豈に偉ならざらんや
 遺烈篇籍に光やけり
 其の未だ時に遇わざるに当りては
 憂いは溝壑に填(うずま)るに在り
 英雄も迍遘する有り
 由り来たること古昔自(よ)りす
 何れの世にか奇才無からん
 之を遺(す)てて草沢に在らしむるのみ

いつの世にも優れた才能を持つ人は必ずいるのだが、その人が用いられるとは限らない。いにしえ輝かしい名を残した人でも不遇の時があったことを嘆いて詠っているこの詩は、自らの前途に不安と希望を懐く中学生に大きな示唆を与えるのではなかろうか。

注1 「中学校における漢文教育の再検討」, 『岐阜大学国語国文学』第26号, 1999年3月

「中学校における漢文教育の再検討(続)」, 『岐阜大学国語国文学』29号, 2002年3月

「中学校における漢文教育の再検討(三編)」, 『奈良教育大学 国文 - 研究と教育』第26号, 2003年3月

「中学校における漢文教育の再検討(四編)」, 『岐阜大学国語国文学』30号, 2003年6月

「中学校における漢文教育の再検討(五編)」, 『岐阜大学教育学部研究報告』=人文科学=第52巻 2号,
 2004年3月 参照願いたい。

注2 「中学校における漢文教育の再検討(四編)」, 『岐阜大学国語国文学』30号, 2003年6月を参照願いたい。